

9/21 朝日

安保法NO これからも

学生「忘れない」学者ら「違憲訴訟を」

安全保障関連法は成立した。それでも、自分たちで考え、声を上げた人たちは動き続ける。これからは――。

▼1面参照
「PEDAL」のメンバー



▲高知 安保法反対を訴える学生ら＝20日午後2時51分、堀内要明撮影

◀横浜 抗議の声をあげる人たち＝20日午後4時54分、白井伸洋撮影

D デジタル版に動画



20日、横浜市や名古屋市で多くの人が集まり、抗議の声を上げた。高知市中心部の路上でも学生グループ「PEDAL」のメンバー

らが集まった。高知大学1年の横川和音さん(24)は「安保法は可決されてしまったが、数の力で議論もいまま押し切ったことを僕らは決して忘れない。これからも声を上げ続けていきます」と言った。

PEDALは5月に発足し、大学生や専門学校生ら17人で構成。若者たちの中心になった学生団体SEALDsなどと連携して東京のデモにも参加した。若者の活動に、触発された人たちがいる。神戸では6月、ベトナム

戦争当時に反対運動を繰り広げた旧「ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)」ころべの元メンバーら約20人が再結集し、安保法案反対の声を上げてきた。

呼びかけ役となった神戸市西区の元会社社員、西信夫さん(68)はベトナム戦争終結後に政治的な活動から身を引いたという。退職後は東日本大震災のボランティアも経験。「政治にはどこか諦めがあった」と振り返る。「ただ、今回は反対世論が盛り上がり、もう一度立ち上がると思う

「9条放棄 馬鹿なこと」 寂庵さん

僧侶で作家の瀬戸内寂庵さん(93)が20日、京都市右京区の寂庵で開いた毎月1回の「法話の会」で、安全保障関連法について「今の政治は間違っている。戦争しないという憲法9条は世界の珍しい宝で、世界が認めている。憲法9条を放棄して戦争ができるようになるなんて、馬鹿なことだ」と批判した。



この日、約160人の聴

た」若者が自分の言葉で反対を訴える姿にも勇気づけられた。8月末に国会前であった大規模集会の際は募金などでバス2台を手配し、

「SEALDs KANS AI」のメンバーら約100人に思いを託した。「『どの元過ぎれば』とはいかない。今後とも思いを一つにして取り組んでいく」

これまで政治と距離を置いてきた多くの学者も運動に関わった。20日には1万4千人を超える学者・研究者が加わる「安全保障関連法案に反対する学者の会」が「安全保障関連法に反対する学者の会」として再発足し、声明を発表した。「こ

の運動の思想は、路上から国会にもたらされ、生活の日常に根を下ろしつつある。そこに私たちの闘いの成果と希望がある」

市民と共に街頭に立った学者は多い。「政治領域に入らないと自戒してきた」という東大の石川健治教授(憲法学)もその1人。

集会や街頭では、フランス語で「私のような者でも」を意味する「マルグレ・モワ」という言葉を使った。動員されていない個人が、小声でも、声を上げなくても、多様な形で存在できる場であってほしいという思いをこめた。

今後は安保法の違憲訴訟を視野に入れる。「今の最高裁は時代に敏感。世論の支えがあれば勝機はある。訴訟を準備しつつ、世論を維持するのが学者の役割だ」

衆の前に「(参院特別委での)強行採決は見苦しかった。安倍さんは自分の名前を後世に残したい、それはつまり、民の心を考えていない」と非難。一方、学生団体「SEALDs」ら若者が立ち上がったことに触れ、「日本はまだ大丈夫。彼らは『これからが勝負。今度の選挙で勝負をつけよう』と言っている。(国会議員を)選ぶ時には気をつけなければ」と話した。(岡田厚)